引き違い間戸（まど）は
なぜ日本で利用され続けるのか

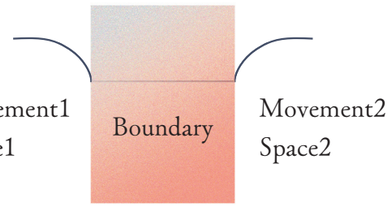
間戸について

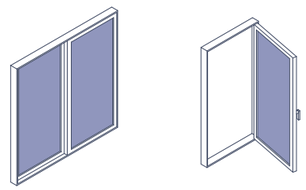
マドの語源は間戸である。これは、柱と梁の構造形式を古くから持つ日本ならではの考え方であり、柱と柱の間の空間を全て開放することができ、尚且つその空間を戸で仕切ることができるのが由来である。それに対して英語の Window は win が風、dow が穴を意味し、正確には風の穴と訳される。これは壁構造が主流の西洋におけるマドの解釈であり、構造上の弱点になる。つまり、マドの意義は構造形式に左右される。構造形式は気候に影響されると考えられるが、軸組が主流である日本は島国で隣国と接していないため防御感覚が比較的低かったという社会的歴史も関係するのではないだろうか。

「引き戸」の歴史

引き戸の歴史は平安時代まで遡る。片引きの障子から始まり、遣戸障子が誕生する。壁は寝殿造りでの几帳や衝立を使用した「仕切り」として認識されていた。「仕切り」は容易に取り払うことができ、空間の膨張、縮小を可能にするものでなければならない。引き戸は人の出入り口と仕切りの両方の役割を担うことから、日本の伝統建築において普及したと考えられる。

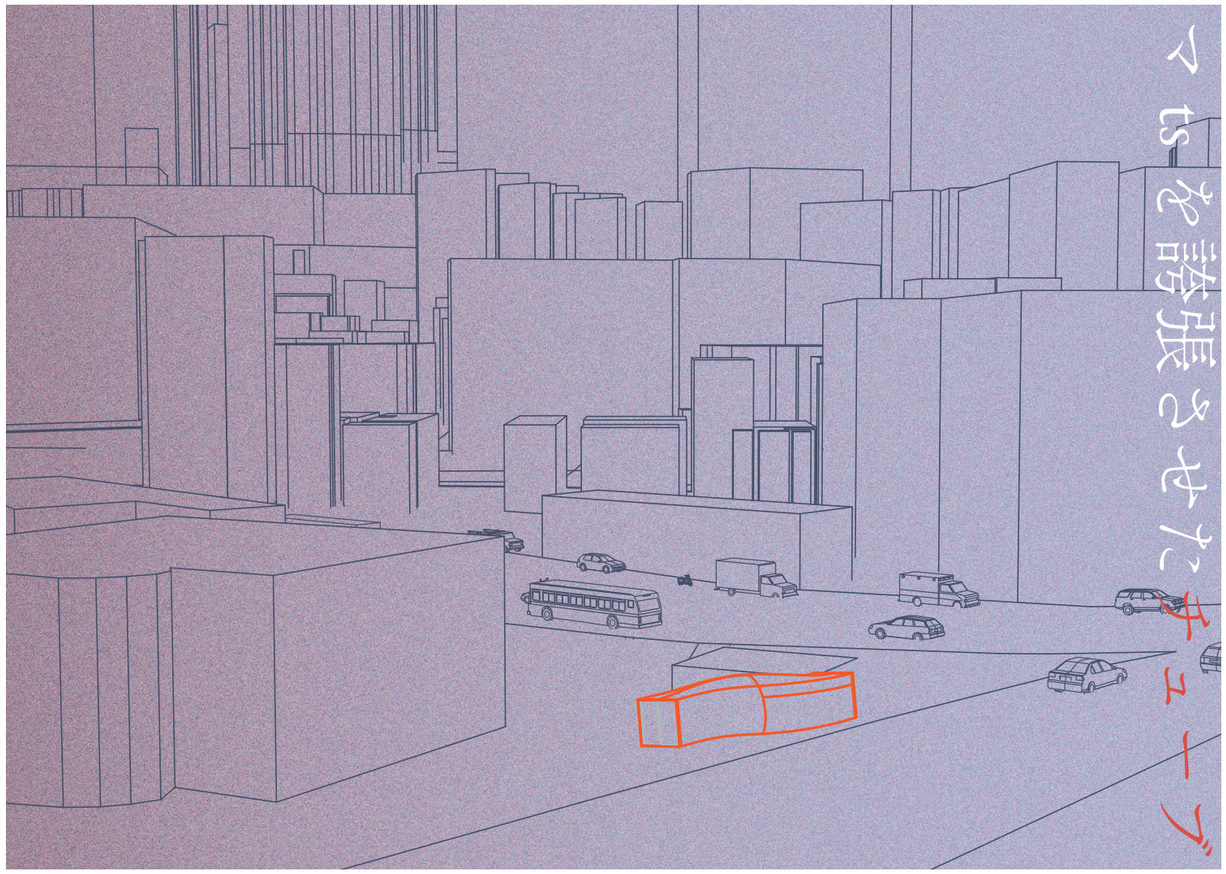
RC や 2x4、柱梁を覆い隠す建築形態、断熱。古来とは異なる住宅性能。それでも引き違い間戸は必要なのか？





現代に残る引き違い間戸の本当の理由

西洋で広く普及している開き窓と比較する。どちらも人の通過が可能で光や風景を取り入れられ、戸とマドの両方の側面を持つ。唯一異なるのは、人が通過する際の行動パターンである。開き窓では足を止めずに、あるいは数歩下がりながらあける。ところが、引き違い間戸では一度足を止め、一拍おく必要がある。引き違い間戸が現代に残る理由は、引き違い間戸によって、日本人が「間」の感覚を養っているからである。「間」は外国語では表されない、空間軸と時間軸を持つ日本独特の言葉である。「間をとる」「間違えた」は時間軸の言葉の一例だ。引き違い間戸を使用し、外と内のハザマで一拍おくことで、日本人は独特の”間”感覚が今もなお研ぎ澄まされている。



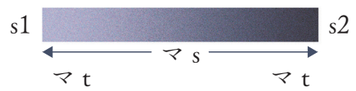
チューブの目的と配置場所

無意識下で体感するマ ts を顕在化させるために、引き違い間戸に以下の操作を加える。

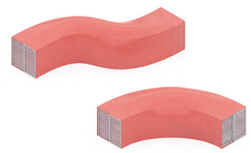
・引き違い間戸を二組用意し、一拍おく操作を連続して二回行わせることで、マ t をより一層意識させる
・二つの空間の境界に第三の空間を設け、s1 と s2 を明確に分離させ、マ s を物理的に引き延ばす

以上の二点の操作を加えた引き違い間戸は、最終的に二つの口を持つチューブになった。

外国人観光客が止まる都心部のビジネスホテルは開口が少なく、引き違い間戸による”間”を感じる機会が少ない。そこで、このチューブを都内において異なる用途が重なる地域に、ゲリラ的に配置する。チューブにカーブを付けることで、公共空間では感じられにくい s1 と s2 を確実に区別することができる。



私は現代建築の建具から和を発見した。
動きを停止し（マ t）、境界・移ろいを感じる（マ s）手法を、

マ ts

と名付ける。